

(様式3)

会議の開催結果について

1 会議名	令和7年度第3回河内長野市文化財保護審議会
2 開催日時	令和8年3月2日(月) 午後2時から午後3時30分まで
3 開催場所	河内長野市役所 7階 行政委員会室
4 会議の概要	議事第6号 ・議案「令和8年度事業計画(案)」について その他報告 ・第2次河内長野市文化財保存活用地域計画の文化庁長官の認定について ・松林寺所蔵 装飾経2点の調査について
5 公開・非公開の別 (理由)	公開
6 傍聴人数	0人
7 問い合わせ先	(担当課名) 教育推進部 社会教育第2課 文化財保護グループ(内線750)
8 その他	

\*同一の会議が1週間以内に複数回開催された場合は、まとめて記入できるものとする。

# 令和7年度第3回河内長野市文化財保護審議会 議事録

日時：令和8年3月2日（月）14：00～15：30

場所：河内長野市役所7階 行政委員会室

出席：中村会長、吉原副会長、山田委員、北川委員、小谷委員、井上委員、富島委員、  
横川委員、市川委員

小川教育長、尾西部長、太田参事、福本課長補佐、鈴木G長、島津副主査

欠席：中井委員

## 1. 開 会

教育長あいさつ※小川教育長は公務により途中退席

中村会長あいさつ

## 2. 案 件

議事第6号 議案「令和8年度事業計画（案）」について

## 3. その他

- ・第2次河内長野市文化財保存活用地域計画の文化庁長官の認定について
- ・松林寺所蔵 装飾経2点の調査について

### 議事第6号

議案「令和8年度事業計画（案）」について

#### ●事務局より説明

#### 北川委員

- ・目標値は、前年度とくらべてほぼ横ばいで設定されている。もう少し高い目標を持つべきではないか。
  - ・事業にはメディアを活用するとよい。メディアと組むことによって、参加者数・来館者数が向上し、より多くの方々に河内長野の歴史や文化財の魅力を知ってもらう機会にできる。そうすることで、予算をより効果的に活用することにもなる。
  - ・市単独事業にこだわる必要はないので、様々な機関と協働するとよい。
  - ・事業を市民向け、市外向けと分ける必要はない。魅力的な事業を実施すれば、市の内外を問わず、自ずと人は集まる。
- （事務局）承知しました。

#### 山田委員

- ・北川委員の意見と同様、目標値が低いと思う。
- ・目標値の指標を「参加者数」から「アンケート」に切り替えたのは、少子化が影響しているのか？児童数が減少し、学校の廃統合などは？
- ・郷土歴史学習の講師はだれが監修しているのか？美術の時間なども利用するとよい。

文化財建造物のスケッチなどを行うことで、美術的なアプローチもできる。

→（事務局）郷土歴史学習は、社会科や総合の時間の枠で、講師は市職員が行っている。社会科にはこだわらない。

#### 小谷委員

八尾市では、小学3年生が「民具」、4年生が「大和川の付け替え」、6年生が「古墳」の学習をしている。教員と協働して副読本を作成したことがある。教材や教育内容を学校の先生と話し合う機会をもつとよい。

#### 吉原副会長

日本遺産が3件もあるのは、大阪府内でも稀有。公民館活動だけではなく、幅広く活用してはどうか？葛城修験などはもっとPRして活用できるのではないか？日本遺産フェスティバルなどで出展できるのではないか？有形のものに加えて無形のものも、全国にアピールできると思う。

#### 小谷委員

葛城修験に関連して、現役の修験者は市内におられるのか。修験者に関連するものなどは学習館に所蔵しているか。展示してはどうか。

→（事務局）現役の修験者は、個人的に何人か存じ上げている。学習館では修験に関連するものは、今のところ寄贈や寄託のお申し出がなく、所蔵していないが、かつて葛城修験の企画展を行ったことがある。日本遺産になったことを含めて展示など何かできたらと思う。

#### 井上委員

- ・目標値については北川委員と同じ意見。「このような事業を行うので、これくらいの集客を目指す」という積算が必要。

- ・予算の推移はどのようになっているか？

（事務局）文化財保存事業の内容や件数によって、年度ごとの変動が大きい。令和7年度は補助事業が多く、令和8年度は少ないので、令和8年度予算要望額は大きく減少している。それ以外、たとえば人件費は単価が上昇しているため、その分の予算要望額は大きくなっている。

#### 富島委員

開山堂の修理の際に視察したい。

→（事務局）承知しました。

#### 横川委員

- ・目標値に関しては、課題を示し、「これをしなければならないので、目標値はこう

なる」という組み立てが必要ではないか。

・子ども文化財解説展をパブリックな場所だけでなく、商業施設などで開催してみてもどうか？大阪自然史博物館が商業施設で事業を実施した際、普段と客層が違うことをいかしてアンケートを取り、課題整理など現状分析に活用した。

市川委員

・地域計画ベースで次年度事業計画を行うのは良いと思う。ただし、地域計画は行政だけではなく市全体でやる計画である。現状はそうになっていないのではないか。

・健康推進とタイアップした事業展開を考えてはどうか。女人高野と葛城修験も‘歩く’という要素があるため、健康づくりにつなげやすい。ダイヤモンドトレールなどをみても需要はあるので、SNSでの情報発信は市民も巻き込むとよい。

小谷委員

八尾市では、ボランティアでSNSの情報発信をしている。

横川委員

・大阪自然史博物館では、友の会のアカウントがあり、SNSで情報発信をしている。学芸員が内容はチェックしているが、基本はおまかせしている。

・学芸員もルールを定めて、業務中でも業務に関連することに限りSNSでの情報発信をしてよいことになっている。

※令和8年度事業の目標値については、再度事務局で検討することとした。

## その他

第2次河内長野市文化財保存活用地域計画の文化庁長官の認定について

●事務局より報告

松林寺所蔵 装飾経2点の調査について

●事務局および吉原副会長より説明。中尊寺経の有識者である赤尾栄慶氏に次回審議会への出席を依頼することを確認した。

小谷委員

「大般若経」、一部の文字のはね方（伸び方）が中世の特徴とするところに似ている。

中村会長

それも含めて次回に審議をお願いしたい。

令和7年度第3回河内長野市文化財保護審議会

議 案 書

# 令和7年度第3回河内長野市文化財保護審議会次第

## 開催日時

令和8年3月2日（月）午後2時～午後4時（予定）

## 開催場所

河内長野市役所 7階 行政委員会室

## 1. 開 会

事務局あいさつ

## 2. 案 件

議事第6号

議案「令和8年度事業計画（案）」について

## 3. その他

議事第6号

議案「令和8年度事業計画（案）」について

別紙のとおり報告します。

令和8年3月2日

河内長野市教育委員会

令和8年度事業計画（令和8年3月2日現在案）

第2次河内長野市文化財保存活用地域計画		令和8年度事業内容	実施期間	目標値	参考	備考
<b>(1) 方向性1 調査・研究 ※第2次計画本文p48～</b>						
①	歴史文化遺産の把握調査事業	-	-	-	-	
②	歴史文化遺産の詳細調査事業	未指定文化財の詳細調査	R7～R8	指定件数 2件	-	
③	歴史文化遺産の相互関連性の調査・研究事業	-	-	-	-	
④	埋蔵文化財の発掘調査・試掘調査・確認調査事業	埋蔵文化財の発掘調査・試掘調査・確認調査事業	通年	依頼に対する実施率100%	R6年度実績100%	
⑤	歴史文化遺産保存継承のための記録保存事業	歳時記プロジェクト映像記録（上高向子ども獅子舞）の作成	通年	記録作成 1件	R7年度実績 1件	
⑥	文化財保護審議会運営事業	文化財保護審議会の開催	年2回	-	-	
<b>(2) 方向性2 保存・整備・継承支援 ※第2次計画本文p50～</b>						
①	指定・登録文化財修理・整備事業	史跡金剛寺境内（鎮守橋）整備事業（3/3年目）	R6～R8	進捗率100%	-	
		重文金剛寺開山堂屋根葺き替え事業（1/2年目）	R8～R9	進捗率100%	-	
		重文金剛寺弘法大師像保存修理事業	R8	進捗率100%	-	
		重文金剛寺（宝物館）防犯防災設備整備事業	R8	進捗率100%	-	
		府指定福田家住宅差し茅事業	R8	進捗率100%	-	
②	指定・登録文化財管理事業 （史跡・有形文化財（建造物）維持管理、防災設備保守点検）	国・府・市指定史跡 施設管理事業	通年	補助件数 10件	R6年度実績 10件	
		国・府指定民家 住宅管理事業	通年	補助件数 3件	R6年度実績 3件	
		国・府・市指定（登録）建造物 防災設備保守点検事業	通年	補助件数 13件	R6年度実績 13件	
③	未指定文化財保存事業	ふるさと歴史学習館蔵品 引き札3点の修理	通年	修理件数 3点	R6年度実績 2点	
④	保存活用計画作成事業	史跡観心寺境内内保存活用計画の策定（スケジュールの作成、策定委員会の設置）	通年	進捗率100%	-	
⑤	収蔵施設の整備等検討事業	-	-	-	-	
⑥	歴史文化遺産保存・公開施設検討事業	-	-	-	-	
⑦	史跡整備事業	史跡金剛寺境内（鎮守橋）整備事業（3/3年目） ※再掲	R6～R8	進捗率100%	-	
⑧	民俗文化財（有形の民俗文化財）収集・保管事業	要望に応じた学習館での調査・収集・保管等	通年	要望への対応100%	R6年度実績100%（寄贈5件）	
⑨	民俗文化財（無形の民俗文化財）保存継承事業	市指定無形民俗文化財 補助事業	通年	補助件数 4件	R6年度実績 4件	
⑩	選定保存地域保全・活用事業	岩湧山茅場の維持管理（茅刈、山焼き等）	通年	進捗率100%	R6年度実績100%	
⑪	防災（消防含む）・防犯施設整備事業	重文金剛寺（宝物館）防犯防災設備整備事業 ※再掲	R8	進捗率100%	-	
⑫	歴史文化遺産保存継承者育成事業	文化財ボランティア育成活動	年1回	実施回数 1回	R6年度実績 2回	
<b>(3) 方向性3 教育分野（学校教育分野）での活用 ※第2次計画本文p54～</b>						
①-a)	郷土歴史学習（小・中学校）の推進事業	郷土歴史学習の実施	通年	市内歴史文化の理解度80%	R6年度実施回数 59回	参加生徒へアンケートを実施
①-b)	総合的な探究活動（小・中学校）の支援事業	子ども文化財解説、高野街道フィールドワーク、烏帽子形城跡保全活動への支援	通年	市内歴史文化の理解度80%	R6年度実施校数 5校	参加生徒へアンケートを実施
①-c)	総合的な探究活動（高等学校）の支援事業	探究活動への講師派遣	通年	市内歴史文化の理解度80%	R6年度実施校数 2校	参加生徒へアンケートを実施
<b>(3) 方向性3 教育分野（社会教育分野）での活用 ※第2次計画本文p55～</b>						
②-a)	公民館・図書館等講座事業	図書館歴史講座・古文書講座	年8回	年間参加人数 330人	R6年度実績 325人	
		公民館等出前講座	年5回	年間参加人数 200人	-	
②-b)	歴史文化遺産の展示事業	ふるさと歴史学習館展示	通年	来館者年間 6,000人	R6年度実績 5,464人	
		滝畑ふるさと文化財の森センター展示	通年	利用者年間 7,500人	R6年度実績 7,109人	
		旧三日市交番展示	通年	来館者年間 1,400人	R6年度実績 1,306人	土日祝のみ開館
②-c)	歴史体験事業	ふるさと歴史学習館および滝畑ふるさと文化財の森センターでの歴史体験	通年	年間参加人数 1,000人	R6年度実績 959人	907人（学）+52人（滝）
②-d)	河内長野版歳時記活用事業	高向・滝畑・日野地区を対象とした歳時記活用事業	通年	-	-	
②-e)	市が管理する施設の維持管理・運営事業	ふるさと歴史学習館維持管理・運営	通年	-	-	
		滝畑ふるさと文化財の森センター維持管理・運営	通年	-	-	
		旧三日市交番維持管理・運営	通年	-	-	
<b>(4) 方向性4 観光分野での活用 ※第2次計画本文p56～</b>						
①-a)	観光ボランティア活動の支援事業	観光ボランティア育成講座への講師派遣	通年	要望への対応100%	R6年度実績100%（実施2回）	
①-b)	日本遺産活用事業「中世に出逢えるまち」	「中世に出逢えるまち」に関連する公民館講座	通年	年間参加人数 50人	R7年度実績 72人（烏帽子形城跡関連講演および現地見学会）	
		日本遺産フェスティバル・日本遺産マルシェへの出展	通年	出展回数 2回	R7年度実績 2回	
		大阪お城フェス2026への出展（自治体ブース・企画展示・イベントブース）	年1回（8/8-8/9）	入場者数 7,500人	R7年度実績 7,387人	
①-c)	日本遺産活用事業「女人高野」	「女人高野」に関連する公民館講座	通年	年間参加人数 50人	R7年度実績 77人（市外での講演会：オンライン配信含む）	
		日本遺産フェスティバル・日本遺産マルシェへの出展 ※再掲	通年	出展回数 2回	R7年度実績 2回	
①-d)	日本遺産活用事業「葛城修験」	「葛城修験」に関連する公民館講座	通年	年間参加人数 50人	-	
<b>(5) 方向性5 地域づくり分野での活用 ※第2次計画本文p57～</b>						
①-a)	地域型住民団体の活動支援事業	団体主催事業への講師派遣	通年	要望への対応100%	R6年度実績100%（実施4回）	
①-b)	テーマ型住民団体の支援・連携事業	団体主催事業への講師派遣	通年	要望への対応100%	R6年度実績100%（実施2回）	
①-c)	地域の伝統文化の継承支援事業	民間助成金等の情報提供による支援	通年	-	-	
②-a)	環境・景観維持保全事業	烏帽子里山保全クラブと連携した史跡烏帽子形城跡の保全活動	通年	進捗率100%	R6年度実績100%	
		三日市小5年生による史跡烏帽子形城跡の保全活動	年1回	主体的に関わっていききたいとする人数50%	-	参加生徒へアンケートを実施
②-b)	健康推進支援事業	金剛寺多宝塔のライトアップ事業（ピンクリボン運動）	年1回	実施回数 1回（10/1-10/3）	R7年度実績 1回	
<b>○関連遺産群事業（関連遺産群5 高向庄に関連する歴史文化遺産） ※第2次計画本文p73～</b>						
関5-1	文化財指定事業	-	-	-	-	
関5-2	関連遺産群をテーマとした郷土歴史学習	高向地区の歴史文化についての郷土歴史学習・子ども文化財解説	通年	市内歴史文化の理解度80%	-	参加生徒へアンケートを実施
関5-3	歴史文化遺産特別公開事業	高向地区を対象とする歴史文化遺産特別公開事業	年1回（1日間）	来場者数 300人	-	

その他

- ・第2次河内長野市文化財保存活用地域計画の文化庁長官の認定について
- ・松林寺所蔵 装飾経2点の調査について

令和8年3月2日

河内長野市教育委員会

令和7年12月19日

## 文化財保存活用地域計画を26件認定しました

文化審議会（会長 しまたに ひろゆき 島谷 弘幸）は、令和7年12月19日（金）に開催された同審議会文化財分科会において、26件（27市町村）の文化財保存活用地域計画を認定することを文化庁長官に答申しました。これを踏まえ、文化庁長官は答申のあった文化財保存活用地域計画を認定しました。

### ●令和7年12月19日に認定した文化財保存活用地域計画（26件（27市町村））

- |                   |             |            |
|-------------------|-------------|------------|
| ①鹿角地域（秋田県鹿角市・小坂町） | ⑪福井市（福井県）   | ⑳新見市（岡山県）  |
| ②長井市（山形県）         | ⑫あわら市（福井県）  | ㉑日高村（高知県）  |
| ③大熊町（福島県）         | ⑬安曇野市（長野県）  | ㉒小郡市（福岡県）  |
| ④水戸市（茨城県）         | ⑭郡上市（岐阜県）   | ㉓添田町（福岡県）  |
| ⑤千葉市（千葉県）         | ⑮富士宮市（静岡県）  | ㉔津久見市（大分県） |
| ⑥東金市（千葉県）         | ⑯島田市（静岡県）   | ㉕宮古島市（沖縄県） |
| ⑦鴨川市（千葉県）         | ⑰精華町（京都府）   |            |
| ⑧相模原市（神奈川県）       | ⑱河内長野市（大阪府） |            |
| ⑨小田原市（神奈川県）       | ⑲尼崎市（兵庫県）   |            |
| ⑩村上市（新潟県）         | ⑳宍粟市（兵庫県）   |            |

※河内長野市は、第2期計画を認定

今回の認定により、認定した地域計画は235件（236市町村）となりました。

#### <担当>

文化庁文化資源活用課

計画推進係 才木・大山

電話：075-451-9669（直通）

広域文化観光部門

文化財調査官 長尾・村上

電話：075-451-4111（内線9670）

# 修 復 報 告 書

真言律 白鳳山 松林寺 藏

紺紙金書	「大般若經卷第一百八七」	卷子装	1 卷
紺紙金銀交書	「梵網經卷下」	卷子装	1 卷
紙本墨書	「紺紙金銀兩字梵網經由来記 ①②」	書 付	2 通

## 修復を終えて

### 1. はじめに

「紺紙金銀交書 梵網経卷下（以下、梵網経）」と「紺紙金書 大般若経第一百八十七（以下、大般若経）」2巻を令和2年10月13日、修復のために預かった。

両巻の調査を「中尊寺経を中心とした平安時代の装飾経に関する総合的研究〈1988-1989〉（以下、中尊寺経調査）」に参加した赤尾栄慶氏（元京都国立博物館 学芸員）に写真を送り依頼をした。さらに同調査に参加した泉武夫氏（元京都国立博物館学芸員）を推薦していただき弊社にて調査を行った。

調査の結果、「梵網経」は藤原清衡（1056-1128）の時代に製作され「清衡経」ともいわれる経巻であるとの見解を得た。また「大般若経」は、中尊寺経とは異なるが、同時代に製作された経巻であるとの見解であった。これについては赤尾栄慶氏も同意見であった。さらに泉武夫氏によると「金銀字の経巻は金地の書き手と銀地の書き手が異なる事が多いが〈梵網経〉は書き手が同一人物であり、めずらしい」との見解であった。

令和7年3月、別件で来社した同じく中尊寺経調査に参加した百橋明穂氏（神戸大学名誉教授）に調査をお願いした。結果〈梵網経〉は中尊寺経であるが書体の感じから南北朝ぐらいになるのでは」との見解を得た。

### 2. 修復前の作品の損傷状態

中尊寺経の内容については幅広く知られ、研究書も出版されているために学識的な説明は控える。

2巻ともに料紙は、打ち紙加工を施した濃紺（藍染・浸染）の艶のある紙である。また表紙は紺紙金銀画 宝相華唐草文、表紙裏面（見返し）は、金銀画 釈迦説法の図が描かれていた。

修復前調査により「梵網経」の表紙は「大般若経」にくらべ硬く厚みがあり不自然なことから、過去の修復の影響ではないかと推察した。

両巻とも千年あまりの間、細い軸に巻かれ、幾度となく展開収納されてきたためか、縦横方向の折れや暴れが生じていた。とくに「梵網経」は、折れから破れへと損傷が進行している箇所が多く見られた。「大般若経」については虫害欠失が多く、紙継ぎ箇所には糊浮きが生じていた。

さらに「梵網経」には巻緒が欠失しており、痕跡のみが残っていた。「大般若経」には、経糸に薄茶・濃茶・黄・萌黄の糸、緯糸に薄茶の巻緒が残っており、オリジナルの可能性も考えられたが、損傷が著しく強度も失われているため再使用はせず別保存とした。

「梵網経」の軸先は蓮華唐草文彫金軸が取り付けられていた。元は他の中尊寺経と同じ金撥軸であったと考えられるが、何らかの理由で過去の修理時、現在の軸先に取替えられたと考えられる。「大般若経」には軸先は無く軸木の先に漆塗りが施されていたが、オリジナルであるかどうかは不明であった。

### 3. 表紙の修復について

修復前調査の際、「梵網経」の表紙は「大般若経」にくらべ硬く厚みがあったことから、過去の修復で2枚に分離して補修を行い、元と同じように糊で貼り合わせた可能性が考えられた。しかし再度、表紙を2枚に分離して修復するには危険を伴うと判断し現状のままで修復を行った。

まずは卷子装を解体した後、表紙と見返しを本紙から捲り取った。その後、表紙の欠失箇所の補修を行いフラットニングを施した。

しかし補修を終えた時点で、やはり表紙に厚みや硬さ以外に感覚的な不自然な感じが残った。そこで試験的に薄い竹べらを使用し、表紙の端へ差し込んでみると簡単に分離した。慎重に作業を進めた結果、やはり間には薄い楮紙一枚が挟み込まれ接着されていた。

表紙および見返しに生じた欠失箇所には、過去の修理時に裏面から損傷より大きな繕いが施されていたため、重なりをできるだけ少なくし元使用した。前回の修理後に生じたと考えられる小さい欠失や破れに関しては、新調した補修用紺紙を使用し、繕いを行った。

繕い後、2枚に分離した表紙および見返しに軽く湿りを与え、裏面に希釈した小麦粉澱粉糊を塗布し、元と同じように貼り合わせた。少し乾燥させた後、表紙を吸水紙で挟み、その上に薄板を置いてフラットニングを行った。吸水紙の交換を行いながら6日間乾燥し平滑にした。修復の結果、硬さや厚みは解消され違和感も無くなった。

通説では中尊寺経の本紙は楮紙であると認識していた。楮紙は経験上、広い面において分離するのは難しい。

今回の修復で「梵網経」の表紙の分離を行った際、雁皮紙のように感じた。そこで表紙の繊維を微量採取し、高知紙産業技術センターに繊維分析を依頼したところ、「梵網経」の表紙は

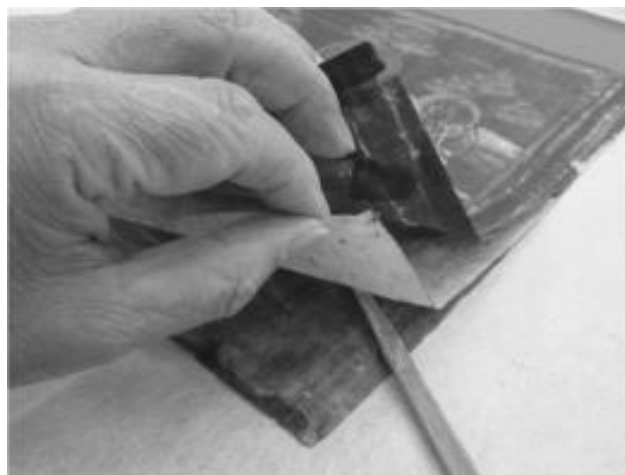


Fig.73 表紙を2枚に分離した

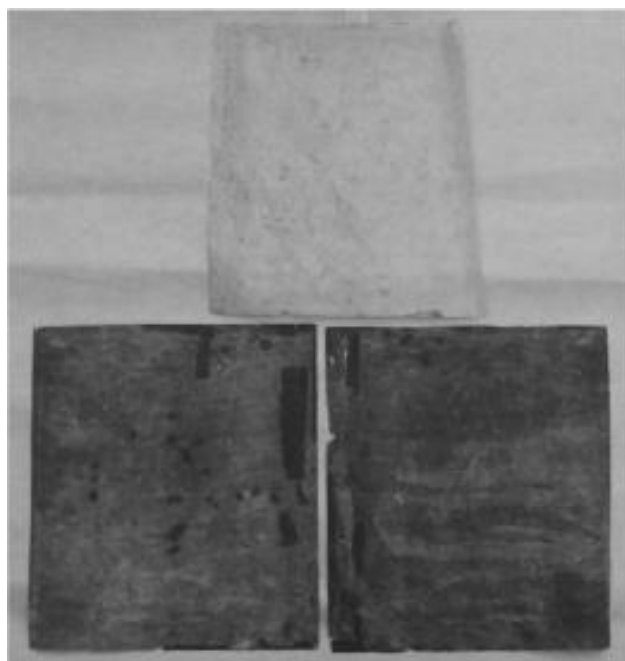


Fig.74 表紙を2枚に分離した。間に過去の修復で施された楮紙が挟まれていた

雁皮紙であった。雁皮紙の分離は比較的容易であるため納得ができた。

また、本紙 1 紙目は繊維試験の結果、楮紙であった。一般に中尊寺経の料紙は楮紙を用いて紺色に浸染を行い、打ち紙加工を行なったと言われていたが、最近の研究調査では雁皮紙も混在しているとのことである。

表紙に関しては、新表紙を配し、さらに軸巻き紙を新調して元と同じ卷子装に仕上げた。元と同じ箇所には八双竹と巻緒を付ける事は可能であるが、八双周辺の劣化が著しく、展開のたびに表紙と巻緒が摩擦することで顔料が微量なりとも落ちる可能性がないとは言えない。

そこで表紙の前に新表紙をつけ、そこに八双竹と巻緒を付けることで、表紙に掛かる負担を軽減した。なお、必要に応じて元の状態に戻すこともできる。



Fig.75 表紙に新表紙を付け、さらに八双竹と巻緒を取り付けることで本紙を保護した。

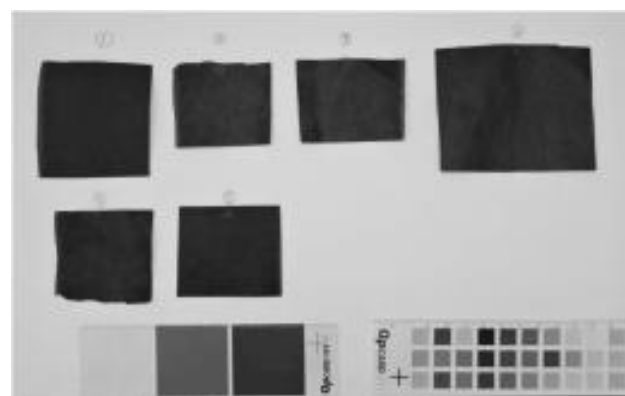


Fig.76 補修紙の製作のためテストを行った

ここで過去の修理者が「梵網経」の表紙を 2 枚に分離し 1 枚の薄い楮紙を間に挟み込んだ理由を考えた。

表紙は雁皮紙で折れやすく、楮紙の本紙部分より多く破損していた。表紙を修復する際、表紙もしくは見返しのどちら側から補修しても、補修紙の糊代が絵に重なり一部が見えなくなる。修理者ならば、そうならないように考えるのが当然で、本紙を 2 枚に分離できれば、表紙もしくは見返しの裏面から補修や折れ伏せを入れることができる。繕い後、元と同じように貼り合わせるのが最善であると思う。表紙が分離しやすい雁皮紙であったために、そのチャレンジは成功し、表紙が楮紙であれば違う修復方法になったのではないかと考えられる。

また過去の修復時には太巻添軸がなかったため、本紙を細い軸に巻いて展開を繰り返すと折れや欠失破損が生じる。そこで折れに強い楮紙を挟み込んで表紙の補強を行ったと思われる。

私にとってこのような状況の修復は 3 度目である。1 度目は 50 年ほど前に勤めていた会社で先輩の助手を務めていた際に、国宝 平家納経の本紙を 2 枚に分離する修復を行った。分離

した本紙を元の位置に戻す作業が非常に難しかった事を鮮明に覚えている。

2度目は私の独立後、平成3年に大和文華館の依頼で、国宝 一字蓮台法華経の修復を行なった際のことである。一字蓮台法華経は平安時代後期に製作されたと考えられている全長32.2 cm 天地 25.9 cmの短い作品である。「梵網経」と同様に過去の修理時、2枚に分離された後、間に薄い楮紙が挟まれていた。この作品も両面に彩色や金銀切箔・野毛・砂子の施された料紙であり、「梵網経」と同じく修復のために分離しなければならない、やむを得ない理由があったと考えられる。

本紙を2枚に分離することは現状を破壊することになり、その当時はいたしかたがなかったと思われるが現在では良しとされず、絵画上に繕いを施して重なり箇所を極力少なくする修復方法が求められる。今回の修復で、過去の修理時に一度分離された表紙を再分離したことは倫理上問題はなかったと考える。

#### 4. 補修紙の作製

修復前調査の段階では、補修紙は似寄りの紺紙（本藍染め）を使用する予定であったが、実際に本紙に当てて見ると色合いに違和感あり、新調することにした。調査の結果、両巻とも頁ごとに濃度や厚みが異なる事が解った。

そこで黒谷和紙（美濃版 幅約90 cm×丈約60 cm 18.75 g/m<sup>2</sup>〈5匁〉、22.5 g/m<sup>2</sup>〈6匁〉26.25 g/m<sup>2</sup>〈7匁〉）3種6枚の紙を使用し紺紙を製作した。

製作は、滋賀野洲市小篠原に藍染工房を営む「紺九」の森卯一氏に依頼した。令和3年10月、完成した紺紙を本紙に当てて見ると、生々しさが際立ち違和感を強く感じた。千年経過した色と異なるのは言うまでもなく当然である。

そこで3年間ほど日の当たる場所に吊り暴露試験を行った。その結果、若干、色が落ち着いたかなと思うぐらいで、求めていた色にはならなかった。担当者としてはオリジナルと同じ藍染のみの補修紙を使用したいという強い思いがあり期待したが上手くいかなかった。

そこで長年の経験で得た方法で古色染めを試みることにした。榛の木の実を煎じ、抽出した液（タンニン系染料）を使用して濃度を調整し浸染を行った。乾燥後に水酸化カルシウム水溶液（アルカリ性）に数分浸した後、数回水洗いを行い、余分な水酸化カルシウムと染着していない染液の除去を行った。本紙は補修箇所によって、紺紙の色や厚みが異なるため、6種類の色合いの補修紙を作り、それぞれの欠失箇所に最適なものを使用し繕った。

#### 5. 細軸から太軸添軸への変更

両巻とも千年あまりの時を細い軸に巻かれ、幾度となく展開されてきたためか、全体に縦横の折れや暴れが生じ、破れなど損傷が進行していた。

現在の修復では、現状を維持することを重要視しており、元の細い軸に巻き展開を行う重要性は修復者にとっても十分承知している。時折、博物館の展示で修復を終えた中尊寺経や紺紙金泥経をみる機会があるが太軸添軸ではなかった。

修復前、フラットニングを行えば折れや皺、暴れが軽減するのではと考え「大般若経」の巻末で試験を行った。打ち紙の艶が消えない程度に湿りを与え吸水紙に挟み込んで10日間軽く加圧した。さらに1日に1回吸水紙交換を行った。

試験の結果、重りを外した時点では平坦になり良い状態であった。しかし時間が経過すると折れや暴れが生じてきた。やはり千年で生じた折れや暴れは、短期間のフラットニングで消えないことが解った。

折れや暴れを修復するには、伝統的な手法によれば、肌裏打ちを行い、折れ伏せを施し、紺紙の紙で総裏打ちを行えば可能である。しかしそれでは層が厚くなり、一紙なりの本紙料紙の美が消滅してしまう。さらに、折れ箇所が多量の折伏せ入れた場合、折れ伏せで肌裏打ちをするような結果となり、本紙が硬くなることは必然である。

そこで虫害欠失や破れ箇所は新調した補修紙で繕い、折れや暴れに関しては、直径4.5cmの桐材太軸を新調し、太く巻いて保存することで損傷が生じる要因を軽減した。さらに太軸の桐材と本紙が直に触れる事の無いように違和感のない色（補修紙と同じ）に染色した楮紙を使用し、長さ約50cmの軸巻紙として新調し巻末に付け廻した。

今回の修復では「現状維持」ではなく「損傷が進行する要因の軽減」を優先した処置を行った。

## 5. 卷緒の製作

### ①「梵網経」

修復前、「梵網経」の卷緒は欠失していたため平打組紐を購入し使用と考えていた。「大般若経」については卷緒が残されていたことから、現物を参考にして製作を試みた。

しかし仕入れた平打組紐では違和感があったため、悩んでいたところ、35年程前に故林屋辰三郎先生（元国立京都博物館館長）にいただいた紐を思い出し、それを当ててみると感覚的にぴったりであった。林屋先生の美術コレクションの修復をしていた際に頂いた紐で、林屋先生曰く「僕が持っていてもしようがないから関地くんにあげるよ」と頂いたものである。35年もの間、机の引き出しの隅に置いてあったのを思い出した。

しかし、改めてよく見ると両端が解れて使用するには無理があった。そこで糸は私自身が染め、平打組紐の製作は外注することで、現物にかなり近い仕上がりとなった。濃紺、薄藍、白の3色を使用した良い卷緒ができたと思っている。後で気付いたのであるが、他の中尊寺



Fig.77  
修復前



Fig.78  
修復後

経に今回新調したものにそっくりの巻緒が付いているのを見て少し驚いた。

そのような不思議なご縁があり、新たに製作した平打組紐は、両巻の巻緒としてお役に立つことができた。

## ②「大般若経」

「大般若経」には巻緒が残されていた。しかし原型を留めている箇所は 3 cm 程度で、あとは組織が崩れ、糸切れした箇所が多く見られ、端部は欠失していた。中程には結び目があり、解くことを試みたが、劣化が著しく不可能であった。

色合いは左右対称で、経糸は薄茶 4 本、黄 1 本、萌黄 2 本、濃茶 4 本、萌葱 2 本、黄 2 本、薄茶 4 本、緯糸は薄茶色の糸が使用された平組織の織紐である。経糸の太さは 21D (デニール) を 10 本合わせたくらいの太さで、緯糸は 21D を 4~5 本合わせたものに見えるが、経年劣化から部分的に細くなっていた。参考までに、絹糸の太さは 9000m の糸の重さが 1g のとき、1D と定義され、数字が大きいほど糸は太くなる。京都の西陣では 21D を基準としている。

修復前の調査で、織紐に紫外線を照射すると黄色の糸が蛍光反応を示した。この糸は黄蘗 (きはだ) の木の皮を煎じた液で染めたもので、古くから染料や漢方薬として使用されてきた。化学染料的には塩基性染料であり、萌葱色にも若干蛍光反応が見られるが、これは黄色と藍の重ね染と考えられる。

私は織紐の製作経験があることから実験的にこの復元を試みた。

21D の生糸を購入して 1m の長さに 10 本を揃えて 1 本とし、18 本の経糸を作った。8 本については薄茶に染色 (浸染) を行った。濃茶 4 本は矢車 (やしや) の実を煮出して抽出した染液を使用した。濃茶は 2 度染めを行い色を濃くした。黄色 2 本は黄蘗の皮を煎じ抽出した染液で浸染めを行った。萌葱色 4 本は黄色に染めたものに青に染まる酸性染料 (合成染料) の液を加え、染めを行った。緯糸は 5 本合わせて薄茶に染色をした (Fig. 82 参照)。

乾燥後、織紐に合わせて染色した経 1m の糸 18 本を並べ揃え、端から奇数・偶数別に竹製



Fig.79 平打組紐の復元作業



Fig.80 平打組紐の復元作業

の1尺差しに通し、その前方に奇数・偶数別に細いタコ糸を使用し糸綜続を作った。また別の3cm角の木材を使用し木枠(幅内径10cm 丈内径100cm)を製作し、長さ100cmの経糸を18本両端に括り付けた。奇数番の糸を手でひき上げて樋口を作り、緯糸を通し、さらに薄い竹ペラを使用しで軽く打ち込んだ。次に偶数番の糸を物差しを立てて樋口を作り、緯糸を通し、竹ペラを使用しで軽く打ち込む、という作業を繰り返した。私自身24~30才頃に、古代裂研究のため着物裂を製作した経験があったことから難しくはなかった。

10cm程を織ってみたところ織幅が実物より2~3mm程細く、巻子の表紙に合わせて見ると違和感があったため織を中止した。再検討した結果、風合いの適した平打組紐を新調し、両巻に取り付けることにした。

以上が「紺紙金銀交書 梵網経卷下」と「紺紙金書 大般若経第一百八十七」2巻、および「紺紙金銀両字 梵網経由来期 ①②」修復のご報告になります。

5年に渡る長期間、お預かりすることになり松林寺様には多大なご迷惑をお掛けした事、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

(文責) 関地 久治



Fig.81 オリジナルの巻緒

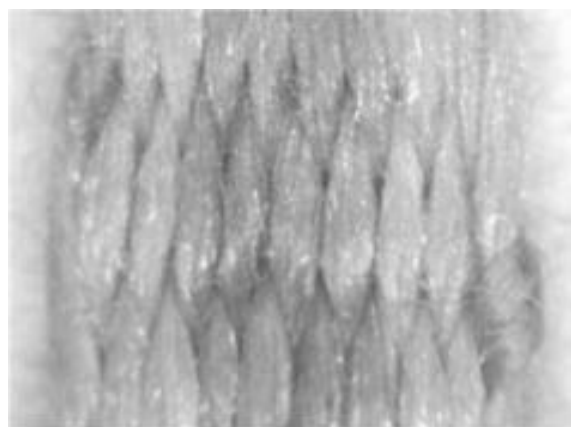
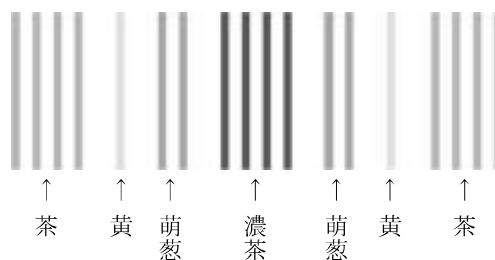


Fig.82 復元した巻緒



## I. 修復計画概要

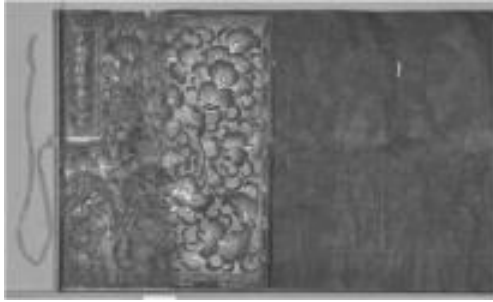


Fig. 1 修復前「大般若経卷第一百八七」本紙部分



Fig. 2 修復後「大般若経卷第一百八七」本紙部分

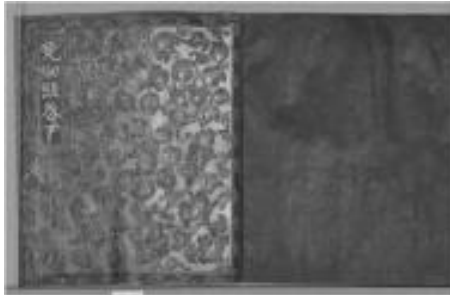


Fig. 3 修復前「梵網経卷下」本紙部分

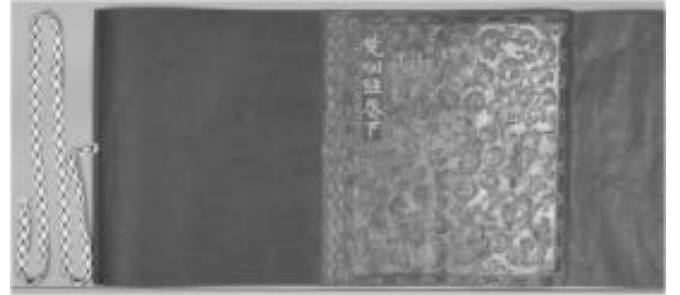


Fig. 4 修復後「梵網経卷下」本紙部分



Fig. 5 修復前「紺紙金銀両字梵網経由来期 ①」本紙全図



Fig. 6 修復後「紺紙金銀両字梵網経由来期 ①」本紙全図



Fig. 7 修復前「紺紙金銀両字梵網経由来期 ②」本紙全図



Fig. 8 修復後「紺紙金銀両字梵網経由来期 ②」本紙全図

作品名	紺紙金書 「大般若経卷第一百八七」 紺紙金銀交書 「梵網経卷下」 紙本墨書 「紺紙金銀両字梵網経由来記 ①②」
種別	典籍 / 古文書
装丁形式	卷子装/続紙
員数	2巻 / 2紙
所有者	〒586-0006 大阪府河内長野市松ヶ丘中町 1607 真言律 白鳳山 松林寺
修復内容	損傷の著しい卷子及び書付について、良好な状態で保存することを目的とした修復を行う。
施工場所	〒606-0026 京都市左京区岩倉長谷町 650-104 有限会社 墨仙堂 代表取締役 関地 久治
施工期間	令和2年12月25日～令和7年5月18日